

ベンケイソウ科マンネングサ属のメノマンネングサ、コゴメマンネングサ、タイトゴメ、ムニタイトゴメはひとつの種に分類するのがよいと結論付け、1981年にこれらに対してもっとも古く発表された *Sedum uniflorum* Hook. & Arn. の亜種、変種とする分類法を提唱した。最近になって *Sedum uniflorum* は1810年に Rafinesque による先行名があることが判った。国際多肉植物学会が編纂する、*Illustrated Handbook of Succulent Plants: Crassulaceae* (Urs Eggli 編集) の編集中に、't Hart から指摘されたが、私自身も著者のひとりとして多忙であったことなどから検討できないまま過ぎてしまい、2001年に出版された英文版「日本植物誌」でも訂正できないままにしてしまった。遅ればせながら、本稿でこのグループの妥当な学名を提唱した。なお、上記のハンドブックは2003年に出版されたが、ここでも 't Hart と Bleij は後続異名の指摘を付して、コゴメマンネングサに *Sedum uniflorum* Hook. & Arn. の学名を使用した。

蛇足ではあるが、近年都市やその近郊で殖

えているオカタイトゴメと称されるマンネングサの少なくとも一部はコマツナギの名前で知られるタイトゴメの1型であり、本種の1変種として分類するのがよいと考え、*Sedum japonicum* subsp. *oryzifolium* var. *pumilum* の学名を与えた。

懇切な指摘をいただいた故 Henk 't Hart 博士、それにハンドブックの共著者である Bert Bleij 博士にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

References

- Ohba H. 1981. Nomenclatural changes and notes on Japanese Sedoideae. *J. Jpn. Bot.* **56**: 181–187.
 — 2001. *Sedum*. In: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), *Flora of Japan IIb*: 21–30. Kodansha, Tokyo.
 't Hart H. and Bleij B. 2003. *Sedum*. In: Eggli U. (ed.), *Illustrated Handbook of Succulent Plants: Crassulaceae*. pp. 235–332. Springer, Berlin.
 (University Museum, University of Tokyo)

オオナワシログミの分布北限 (大橋広好^a, 吉田 繁^b)

Hiroyoshi OHASHI^a and Shigeru YOSHIDA^b: The Northernmost Locality of *Elaeagnus* × *submacrophylla* Servett. (Elaeagnaceae)

オオナワシログミは本州関東地方以南、九州、朝鮮南部 (大井・北川 1992) あるいは本州関東以南の太平洋側、伊豆諸島、九州 (Ohba 1999) に分布するとされている。しかし、宮城県植物目録 2000 (2001) には本種の北限として宮城県内4産地が載せられており、その中では石巻が最も北に位置している。ところが、本種はさらに北の岩手県陸前高田市気仙町長部と米崎町米ヶ崎、および大船渡市末崎町船河原 (北限地) でも発見されている。

吉田は1982年以来岩手県南部三陸沿岸地域で広田半島を中心とした地域の植物相を調べてきた (吉田 1985)。1983年6月23日に陸前高田市広田町広田崎海岸でマルバグミ (吉田 1984)、同年10月13日に同町長洞でナワ

シログミを発見した (吉田 1989)。両種とも明らかな野生と考えられるもので、現地で開花し結実する。なお、ナワシログミは伊豆半島以西 (初山 1989, Ohba 1999)、マルバグミは秋田県を北限として太平洋側では茨城県以西 (大井, 北川 1983, 1992) に分布するとされていて、両種ともこれまで岩手県に分布することは記録されていない。さらに、吉田は1983年に陸前高田市気仙町長部と米崎町米ヶ崎のそれぞれ海岸で野生と思われるオオナワシログミを発見した。この標本は金井弘夫氏と初山泰一氏によってその同定が確認されていたが、その事実は地元の新聞「岩手日報」で1989年8月24日に報道されただけで、吉田も学界で公表しないままであった。その後、吉田は2002年11月と2003年1月に大船渡市

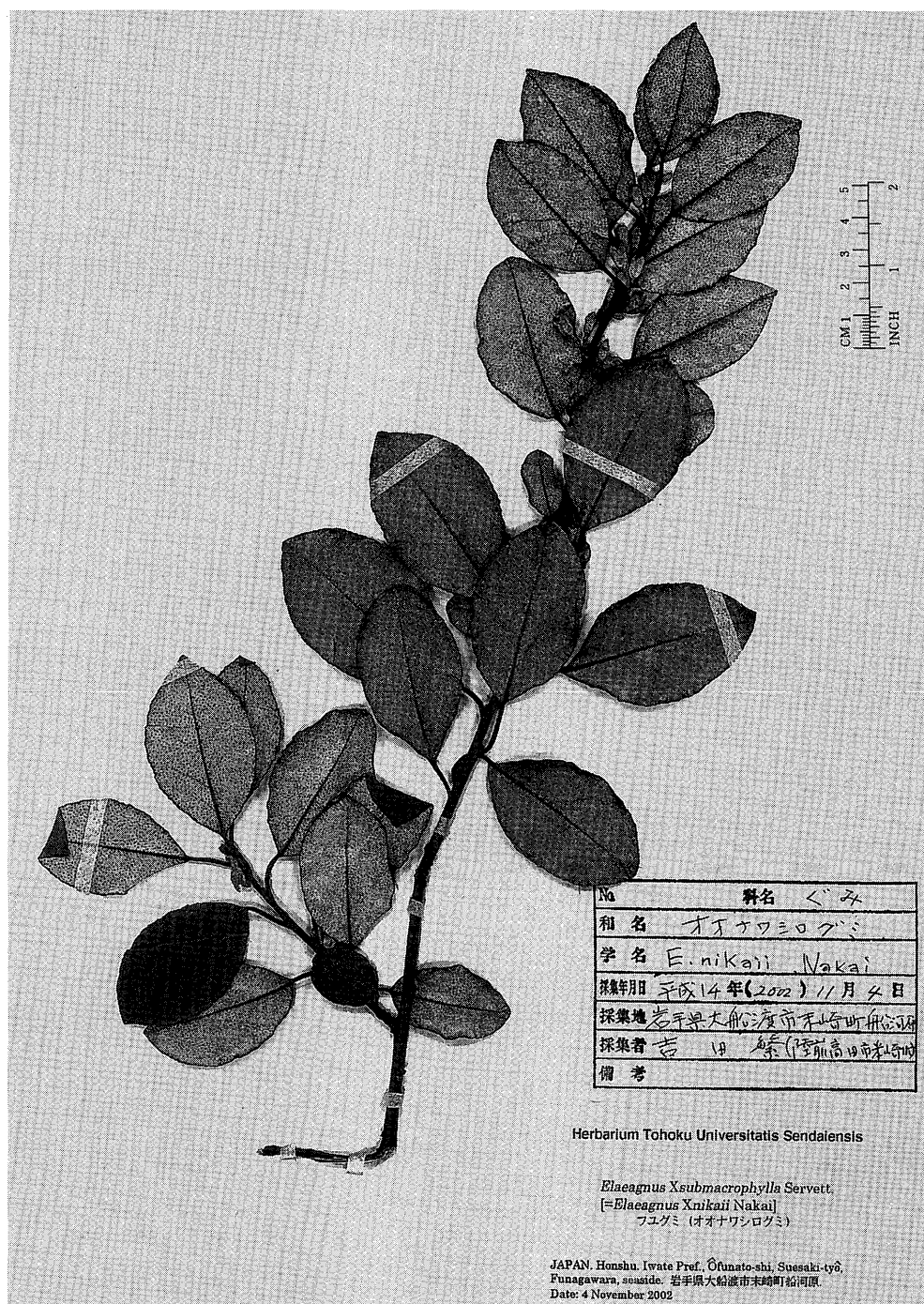


Fig. 1. *Elaeagnus x submacrophylla* Servett. collected at the northernmost locality (Voucher specimen: Iwate Pref., Ofunato-shi, Matsuzaki-chō, Funagawara. 4 Nov. 2002. S. Yoshida, TUS).

末崎町船河原でオオナワシログミと見られる個体を見だし、大橋がその同定を確認した。

新産地は大船渡湾に面した海岸で、JR 大船渡線脇の道路沿いにあり、長部と米ヶ崎が広田湾に面しているのに対して、広田半島を挟んで反対側にあり、長部から直線距離で約 9 km 東北に位置する。

2002 年 11 月 4 日に吉田が長部と船河原のオオナワシログミ生育地の植生を調査した。長部ではオオナワシログミは海に面した断崖の海拔約 10 m の所に 2 本あり、その 1 本は幹の直径が根元で約 20 cm、3 本に枝分かれしていてこれまで岩手県で見られた一番大きい株である。それより下にはハマギクがある。ミズナラが多く、コナラ、スギ、アカシデが混ざり、低木にヤブツバキ、マサキ、フジ、草本にヒメカンسゲ、ヤマシロギク、イヌヨモギなどがある。このように、オオナワシログミは人為的に植えられたものとは考えられない環境にある。船河原ではこれまでに 2 ケ所で 7 本が見付かっている。1 ケ所ではオオナワシログミは粘板岩の岩盤上で林縁の崖にあり、数年前 1 本は伐採されたが、3 本が現存していてその 1 本は実生と思われる小形の個体である。アカマツ林でクリ、コナラ、スギ、アズキナシ、ミズギが混ざり、低木にサンショウ、オオバクロモジ、クロウメモドキ、ヤマツツジなど、草本にオオバジャノヒゲ、ヤマシロギク、ハエドクソウなどがある。ここも人為的な分布とは考えられない。

オオナワシログミはマルバグミとナワシログミの雑種と考えられている。しかし、北限地である長部と船河原のオオナワシログミ生育地には推定される両親種は生育せず、またそれらの生育地に接してもいない。長部はマルバグミの生育地広田崎と広田湾を隔てて直線距離で約 9 km 離れており、ナワシログミの長洞へは広田湾と広田半島を隔てて直線距離で約 7 km ある。一方、船河原は長洞へ直線距離で約 5 km、広田崎へ約 10 km 離れている。

なお、オオナワシログミは関東では庭に植えられることもあるといわれており（初山 1954）、仙台でも庭木とされ（証拠標本：Hayashi 30 Jan. 1962 TUS; Ohashi 66424 TUS）、ときに逸出したと思われる標本がある

（Yonekura 1231 TUS）。しかし、岩手県のこの地方では常緑のグミ類は庭木などに栽培されていないようである。

吉田は大船渡市内の民家にナワシログミが生えているところがあり（証拠標本 Yoshida 21 Feb. 2003 TUS）、これは多分鳥によって種子が運ばれたものと想像している。ナワシログミは自生地 of 長洞海岸では種子を作り、子株も生育している。東北大学文系キャンパス内の藪にも 1958 年以前から栽植されていたと思われるオオナワシログミ 2 株が繁茂し、稀に果実をつける（証拠標本 Ohashi 66120 TUS; Ohashi 66425 TUS）。さらにこの 2 株から 100 m 位離れた同じ藪の中には実生から育ったとみられる小さい 1 株がある。生育と環境条件によっては仙台市内でも多分自殖によって種子ができ、自然分布する可能性もあるのではないと思われる。これらの株は岩手県のオオナワシログミより葉が細くて狭楕円形あるいは狭卵形である。

Elaeagnus × *submacrophylla* Servett. [in Bull. Herb. Boiss. ser. 2, 8: 387 (1908) in clave, nom. nud.] in Beih. Bot. Centr. 25 (2): 84 (1909).

オオナワシログミ

証拠標本: 岩手県大船渡市末崎町船河原、海岸。Ofunato-shi, Matsuzaki-chô, Funagawara. 39°10'N, 141°42'30"E. seaside. 4 Nov. 2002. Shigeru Yoshida (TUS) [Fig. 1], 16 Jan. 2003. S. Yoshida (TUS); 陸前高田市気仙町長部双六、海岸。Rikuzentakada-shi, Kesen-chô, Osabe, Sugoroku. 38°90'N, 141°37'30"E., 10 m above the sea. 25 Oct. 2002. S. Yoshida (TUS).

Elaeagnus × *submacrophylla* Servett. is generally understood to be distributed southward from Kanto District in Honshu and Kyushu in Japan (Ohwi and Kitagawa 1992, Ohba 1999), but the hybrid has recently been recorded in a flora of Miyagi Prefecture in northeastern Honshu. We present here an even more northerly record for the plant. It was discovered by Yoshida, one of the authors, in Ofunato-shi and Rikuzentakada-shi in Iwate Prefecture where the putative parents of the hybrid (*E. macrophylla* Thunb. and *E. pungens* Thunb.) were also found. This northernmost habitat is located at about 39°10'N, 141°42'30"E.

引用文献

宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会. 2001.

- 宮城県植物目録2000. 石巻.
- 舩山泰一 1954. *Elaeagnus submacrophylla* について. 植物研究雑誌 29: 347-348.
- 1989. グミ科. pp. 83-89. 佐竹義輔他 (編): 日本の野生植物 木本 I. 平凡社, 東京.
- Ohba H. 1999. Elaeagnaceae. In: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), Flora of Japan IIc: 152-158. Kodansha, Tokyo.
- 大井次三郎著, 北川政夫改訂. 1983. グミ科. pp. 1051-1057. 新日本植物誌 顕花篇. 至文堂, 東京.
- , —— 1992. グミ科. pp. 1051-1057. 新日本植物誌 顕花篇. 改訂版. 至文堂, 東京.
- 吉田 繁 1984. 温暖帯植物マルバグミ陸前高田に産す. 岩手植物の会会報 (21): 1-4.
- 1985. 陸前高田沿岸部の植物—広田半島を中心に—. 岩手植物の会会報 (22): 6-13.
- 1989. 温暖帯植物ナワシログミ陸前高田に産す. 岩手植物の会会報 (26): 27-30.
- (*東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館,
^b岩手県陸前高田市 [])

オオナワシログミについて (大橋広好)

Hiroyoshi OHASHI: Notes on *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. (Elaeagnaceae)

別報で吉田 繁氏とともにオオナワシログミの北限分布について報告した (大橋・吉田 2003). 本報告では本種の分布, 学名, 雑種性について整理した. まず本種はすでに四国からも記録されているが, 日本の代表的な植物誌では分布域として四国が欠けていることを指摘しておきたい. 次にその正名および学名の変遷について整理してみた. 本種は雑種とされ, *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. が当てられている. この学名は1908年の発表とされるが, 正式には1909年に発表されたものである. 最後に本種を雑種とみなす根拠をさらに明らかにする必要のあることを指摘した. なお, *E. ×submacrophylla* Servett. にはフユグミなる和名も使われたが (舩山 1989), 本報告ではオオナワシログミと呼ぶこととしたい. *E. ×submacrophylla* を *E. nikaii* Nakai と同種とみてこの学名にオオナワシログミを用いた原 (1954) と舩山 (1954) に従った.

本報告をまとめるに当たりオオナワシログミの標本を送って下さった吉田 繁氏, 文献についてご協力いただいた東京大学邑田 仁教授と農業技術研究機構池谷裕幸博士ならびに徳島県の分布について調べて下さった徳島県博物館茨木 靖氏にお礼申し上げる.

1. 四国のオオナワシログミ

主な植物誌では, オオナワシログミの分布は本州 (紀伊, 長門), 南朝鮮 (大井 1953, 1965), あるいは本州 (関東地方以南), 九州,

朝鮮南部 (大井・北川 1992), あるいは本州 (関東地方以南, 太平洋側), 九州, 伊豆諸島 (Ohba 1999) とされている. このように四国は分布域に含まれていないが, 既に「高知県の植生と植物相」 (山中 1978) によって高知県でオオナワシログミの2産地 (土佐清水市と沖の島) が報告されている. これらの2地域からは推定両親種とされるマルバグミもナワシログミも共に記録されている. 故山中二男博士が遺された標本は東北大学大学院理学研究科植物標本室 TUS に総てが寄贈されており, 目下整理中である. 山中 (1978) に挙げられている種類はほとんど博士の収集した標本に基づいているので, 高知県産オオナワシログミの証拠標本も TUS にあると思われるが, まだ貼り付けられていないので現在は確認できなかった. また, 徳島県にも知られており (阿部 1990), 茨木氏によれば徳島県博物館標本室 (TKPM) には徳島県阿南市伊島 (阿部近一), 徳島県海部郡中木頭村平谷 (赤沢時之) の標本があるという. 四国の他の2県にも分布する可能性が高いと思われる.

2. オオナワシログミの学名

オオナワシログミの学名として *Elaeagnus ×submacrophylla* Servett. あるいは *E. ×nikaii* Nakai が用いられている. オオナワシログミは Nakai (1918) が自然種として (雑種ではなく) 記載した *E. nikaii* に対して名づけた和名である. *Elaeagnus ×submacrophylla* という